西部公民館だより

発行　西部公民館
神ノ郷町壱町田12-1
TEL:68-7233

11月の事業実績と1月事業計画

日　程	事　業　名　称	実　績	備考
11/2(土)	生涯学習講座　押絵教室(3)	済	
11/16(土)	公民館まつり実行委員会(関係代表者)	済	
12/22(日)	公民館役員会＆消火・避難訓練		

学区文化祭

10月24日(木) 本年より平日開催となった学区文化祭が開催されました。
本年の地域文化活動は昨年の山本地区から向山地区に替わってチャラボコを披露してくれました。
4年生1人、5年生2人、6年生2人で上手に叩いてくれました。6年生になると力強さが増していい音を奏でていました。

【向山チャラボコ保存会】

何年か前の秋に上ノ郷城跡にてお月見会を開催したことが有ります。その時にも村田青水さんを招いて秋の夜長に中秋の名月と琵琶の音色を楽しんだそうです。今回はその縁もあり、なかなか触れる機会の少ない琵琶を児童にも楽しんでもらおうと出演して頂きました。初めて琵琶をみる児童がほとんどで、弾き語りに耳を傾けていました。
祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり　有名な平家物語ですが言っていることの中味をよく理解していなかった私は勉強になりました。

【薩摩琵琶　　村田青水さん】

最後にやまびこオカリナの会の皆さんにより『栄光の架け橋』、『幸せなら手をたたこう』、『さんぽ』を披露して頂きました。
最初にオカリナのサイズと音程の違いなど楽器の紹介もしてくれて児童も興味深そうに聞いていました。
演奏が始まると児童も手拍子、体を動かすなどして一緒に楽しんでいました。

【やまびこオカリナの会の皆さん】

公民館まつり実行委員会

令和6年度公民館まつり開催に当たり各クラブ・サークル関係者にて事前検討を行う為の実行委員会を11月16日(土) に開催しました。
本年も例年と同様に一階で展示部門、二階で演芸部門の開催としグラウンドではグラウンドゴルフホールインワン大会を開催します。今年は児童向けに演芸部門鑑賞スタンプラリーの検討することで関係者の同意を得て進めていきます。

西部小と北部小について考える第２回地域説明会

11月10日(日) 西部小学校体育館において第２回地域説明会が開催されました。
第１回説明会の内容から大幅な見直しがなされましたので地域の方は再確認しておいてください。

	当初案（第1回説明会）	変更案（第2回説明会）
1	R9年度より西部小、北部小が統合 保育園、公民館、児童クラブも同様	**変更なし**
2	西部小跡地に中部中を移転新設	**中部中の移転は中止し現在地で存続**
3	中部中移転後の跡地に複合施設新設 （小学校、保育園、公民館、児童クラブ）	**新用地(未定)に複合施設を新設**

第３回説明会は12月中に開催予定です。

地域安全・青少年健全育成市民大会

10月23日　市民会館中ホールにて令和６年度地域安全・青少年健全育成市民大会が開催され、中部中代表の中山瑠子さんがふれあい活動をテーマに発表されましたので地域の皆様にも紹介します。

『ふれあい活動』　　中部中学校３年　中山　瑠子

私の出身小学校は西部小学校です。
西部小学校は、中学校で一緒になる中央小学校や北部小学校より、比較的人数の少ない学校です。どの学年も、１学年にクラスは１つで、全校生徒も６０人程度でした、私の学年は特に人数が少なく、たった６人で６年間の小学校生活を共に過ごしてきました。
そんな私にとって中学校に入学することは、とても大きな不安がありました。学年には１００人以上、クラスには３０人以上の人がいました。テストや行事など心配なことがいっぱいで中学校は怖いところだと思っていました。
西部小学校の運動会は、午前中に小学校の運動会が終わると、午後からは地域の方と一緒に活動する運動会、ふれあい活動となります。中学生になっても地域のお兄さん、お姉さんとして参加します。私が小学校のとき中学生のお兄さんやお姉さんは、みんな優しくて私もこんなふうになりたいと思っていました。それと同時に、中学生の先輩は怖い存在ではなく、頼れる存在だと感じていました。
私も中学生になり、今度は私たちがふれあい活動でお手伝いする側になりました。かつてのお兄さんやお姉さんのように、小学生の子に笑顔で接することを意識しました。
そしてあっという間に中学校生活は過ぎていき、とうとう３年生になりました。今年も賞品を渡す係になりましたが、小学生の子たちの笑顔が増えたり不安を取り除いたりすることができるように、私たちにできる最大限のことを、一生懸命に行いました。ふれあい活動に中学生として西部小学校に手伝いに行くのは、これが最後だと思うととても寂しく感じます。そしてあんなに温かく、強い絆で結ばれた西部小学校が今でもとても恋しいです。中学生のお姉さんとして地域の運動会に参加するのは今年が最後でした。ですが関りをこれからも絶やさないようにこれからも地域の運動会に参加しようと思います。そして、今の中学１、２年生やこれから新しく中部中学生になる西部小学校のみんなにもこの温かいふれあい活動や地域とのつながりを大切にしてもらい、今よりもっと温かい地域にしていきたいです。

『編集者より　・学区体育祭は計画から人集めまで多くの方々の努力で実施できています。
児童や生徒の皆さんがこの様に考えていてくれることをうれしく思います』

大宮(現宮成)の一本松の話

今回は宮成地区のむかしばなしを掲載します。出展は形原北小PTA編「いたずら地蔵」に掲載されている大宮の一本松というお話で、郷土史の何種類かの本で読むことが出来ます。
落合川流域に幹の太さ4.2メートル・高さ13.5メートル・枝の広さ12メートル・樹齢800年を経ている老松です。里の人はこれを一本松と呼び、今川義元物見松ともいっている。永禄年間、神ノ郷の城主鵜殿氏はその優雅な枝振りを愛し、歌や詩でこの松をたたえた。この松は、昭和２８年の１３号台風の頃まで生きつづけ、ひょっとしたら見たことがあると言う方もおられると思います。
貴重な一枚の写真を載せさせていただきます。アパートの様な建物は、長老にお聞きしましたら「大成兵器」の社員寮だそうです。

大宮の一本松　　―中央小学校区―

これは、宮成町のあたりを、まだ、大宮村といっていた頃のお話です。
村はずれの川ぞいに一本の大きな松の木がたっていました。この松の木は、たいそう年をとっていたというだけではありません。なんでも、村人たちのねがいごとを聞きとどけてくれたり、心を入れかえさせたりすることさえできたそうです。
このように、ふしぎな力を持っていましたので、いつの頃からか、村人たちは、この松の木のことを“願かけの松”と呼ぶようになりました。
それは、秋の夕ぐれ時のことでした。
“願かけの松”の根元のススキが、かすかにゆれました。うす暗くなったそのあたりで、三つの黒いかげが動いたように見えました。
まぎれもなく、それは、三人の盗っ人でありました。
「おい、見えるか！むこうから、えものがやって来るぞ。」
「しいっ！大きな声を出すな。うん、二人連れらしいな。」
「見ろよ、二人は母娘みたいだ。」
「ちょっ！白い着物なんぞ着やあがって。いやに落着いてらあ。」
「かまったこたあない。いい家の女らしいから……。お金は、たんまりいただきだ。」
こんなおそろしいたくらみが、待ち受けていることを知らない母と子が近づいて来ました。そして、母娘が“願かけの松”にさしかかった時です。とつぜん、二人の前に盗っ人どもがとび出しました。
「やい。やい！女どもよく聞け。われらは、三人組の盗っ人だ。命が惜しかったら、持ち金を全部おいていけ。」

「……。」
「金を出せといっているのが、わからないのか。」
「……。」
かんかんにおこった盗っ人の頭は、刀をふり上げて、
母娘に迫りました。　その時、母娘が初めて口を開きました。
「いけません。人のものをうばうのはよくありません。」
それは、ふしぎな声でした。
心につきささるようなふしぎな声を聞いたとたんに、盗っ人たちの体は、石の仏さまのように動けなくなってしまいました。
あんなに、いばっていた三人の盗っ人どもも、いまはどうすることもできません。目を白黒させながら、「悪うございました。心を入れかえますから、どうか、おゆるしを……。」
と、入れずみをした盗っ人が、あわれな声でたのみました。
すると、どうでしょう。三人の体は、もとどおりの盗っ人にもどったのです。
そこで、盗っ人たちは、しめたとばかり、ふたたび母娘におそいかかりました。そして、こんどこそうまくいくのではないかと思ったしゅんかん“願かけの松”の枝がするすると伸びました。その枝は、まるで人間みたいに、三人の盗っ人をきゅうっと捕りおさえたのです。
その時、わずかに、手足をバタバタさせ、息も絶え絶えになっている三人の盗っ人の耳に、
「ま人間になれ！まじめに働いて、たからものを生み出すのだ。」
という声が、地の底からわいてくるようにひびきわたりました。
「は、はい。ま人間になります。うそではありません。どうか命だけは……。」
やっとのことで、ゆるされた盗っ人たちは、命からがら、いちもくさんに逃げていきました。

（1月号に続く）

鵜殿氏の研究のこぼれ話（15）

長岡藩の鵜殿氏について　（石井　文雄）

新潟県長岡市は、牛久保出身の牧野氏の城下町でした。天正十八年に上野国大胡藩、元和二年に越後国長峰藩、元和四年に長岡藩で、明治維新まで転封がありませんでした。戊辰戦争の敗戦により窮乏した財政を助けるために、友藩から送られた「米百俵」を育英に使った故事が有名です。その長岡藩から出た鵜殿団次郎と弟の白峰駿馬を紹介します。
団次郎の父は鵜殿豊太郎で、百五十石の藩士でした。五歳の時に父をなくし、母は再婚して、弟と妹が生まれました。養父は、鵜殿瀬左衛門と言いました。もともと鵜殿家は槍術の家で、団次郎は武芸も習いましたが、学問にも熱心で、特に数学が得意でした。
藩校に飽き足らず、江戸に遊学したいと父を説得し、三年の遊学を許されました。苦学して蘭学や英学を修め、文久二年に幕府の蕃書調所教授となり、数学を教えました。この学校は、東京大学の前身の一つです。団次郎は、覚えた知識を応用して、航海や軍事の研究にも力を注ぎました。西洋人のパンを実際に作って食べたそうです。
帰郷した団次郎は、塾を開き、洋学を教えました。著名な弟子の一人に、海軍大将になった伊東祐亨がいます。戊辰戦争が始まると、目付になった団次郎は、幕府の役人として諸藩の要人と交渉しましたが、長岡は官軍と戦火を交えました。故郷に帰ると、城下は悲惨な有様で、慶応四年に三十八歳の若さで病死しました。戒名は、文海院殿義倫英忠居士。昌福寺に団次郎の墓碑がありますが、実は「米百俵」の国漢学校の場所でもあります。
白峰駿馬は文久二年に江戸に出て、兄の家に下宿します。勝海舟の軍艦教授所に入学して航海や造船や測量などの知識を学びました。神戸に新設の海軍操練所に移って、学業を続けました。亀山社中に加わり、坂本龍馬と友人でした。米国に留学して造船を学び、帰国後は官を辞して、白峰造船所を開業しました。明治四十二年に叙勲され、六十三歳で死去しました。戒名は、樹徳院殿顕理居士。青山霊園に白峰駿馬の墓碑があります。